E・シュトラウスの現象学

――感覚作用の交流仕方について――

元明　淳

本論稿では、現象学的人間学派に属し、同時に精神病理学者でもあったエルヴィン・シュトラウス(一八九一―一九七五)の著作『感覚(官)の意味』(一九三五)[1]に依拠して、哲学的意識論における新たな感覚概念の展開を探ってみたい。この作業は、従来の現象学的感覚論の基本的立場をその抽象的な認識の構図から解放し、かつ補完する一助ともなるはずである。

周知のごとく 伝統的教説に従えば、感覚作用(Empfinden)は専らそれの完成された形態、即ち認識作用(Erkennen)の方から、先行的な低次の段階、認識の一形式としてしかみなされず、その固有な体験様式は不問に付されてきた。またこうした「感覚作用を、対象についての意識の成立にとって有する機能に関してのみ取り扱う」[2]古典心理学の立場と連動して支配的なのは、感覚を生理・物理学的過程によって自然法則的に秩序づけられた刺激(興奮)とみなす客観的心理学の理論である。しかし既に今日の現象学的感覚論の発展段階において、上述の立場の理論上の克服が図られ、むしろ認識作用以前の現象性の所与様式に即して、感覚の存在仕方をこそ問う視点が導入されつつある。それは現代の術語では「世界―内―存在の仕方」としての感覚作用を問う問いに集約できよう。なるほ

ど、意識はこの感覚を通して世界と直接的に関わっており、それゆえに世界―内―存在の、あるいは意識構造の一契機としての感覚作用の現実的分析が必要不可欠となるわけである。

シュトラウスもまたこの動向の流れに与しており、感覚作用の本質を自我と世界との生き生きとした交流仕方(Kommunikationsweise)のうちに見てとり、そこからして諸感覚の個別性、差異性〔感覚のスペクトル〕や、否、むしろそれらの前提となる共同性、相貌性〔感覚の統一〕に重きをおいて、事象に即した感覚作用の豊かな分析を行なっている。肝要なのは、従来の、ややもすれば視覚、聴覚分析に偏りがちな感覚の差異性に基づく極めて抽象的、技巧的な構えを括弧に入れて、感覚する主観を生気づけられた体験作用として自我の世界への振る舞い(Verhalten zur Welt)において記述し、それを通じて感覚作用にその具体的内実を指定してやること、これである。

以下では、差し当りシュトラウスの論述に沿いながら、彼の徹底した批判の論点である客観的心理学の方法的立場、との対決、即ち感覚作用を脳髄や神経系の生理学的事象に還元する見方から結果する、観察主体の自己言及不可能性の問題やそれに伴う人格相互の交流の欠如を指摘し、刺激―有機体の関係では生きた体験作用は捉えられないということを証明する。次いで、感覚作用を認識の先行段階として解釈するのではなく、直接的な世界への振る舞いとみなし、感覚の表現性質たる「相貌的・人相学的な(physiognomisch)」性格と、それの空間・時間的な体験形式としての「遠さ(Ferne)」の現象、換言すると現象学における「活動空間(Spielraum)」の現象の分析を通して、例えばフッサールなどでは充分に展開されなかった、体験主体の世界との情動的交流仕方を本質とする感覚作用について考えてみたい。

I

シュトラウスは有機体が物理的刺激を被る際の取り巻きを周縁(Umfeld)、体験する生きもの〔これには動物も含まれる〕が自己運動(sich-bewegen)を介してそこへと方向づけられる可視的対象の群を周囲世界(Umwelt)と呼び、術語上両者の関係を明確に区別する。感覚作用と自己運動との内的連関を主題化するに先立って、まずは客観的心理学の研究の前提を批判の俎上にのせ、さらに刺激—有機体の図式における観察者自身の実験状況への引き入れという観点から、その方法論の不徹底さ、問題点を指摘しよう。

第一点、感覚の内存在(Darinsein)について。解剖学的知見に基づいて有機体を客観的な空間、時間の内で考察する客観的心理学では、個々の諸器官は空間的に相互外在的な諸部分に留まり、それらの諸機能も時間的に分離された出来事とみなされる。ここでは感覚器官(中枢)と運動器官(中枢)、求心性神経と遠心性神経、およびその軌道上を経過する諸刺激の外的結合、即ちそれらの分析的、生理学的連合しか認められない。要するに、感覚とその本質をなす運動は、個々の感覚と個々の運動の加算的集合に還元されてしまう。

ここで根本的に問題なのは、感覚器官の内部(in)、神経路の内部、ひいては大脳皮質の内部に局所化された感覚の内存在と、それらを惹起する物理的刺激を単なる客観的な幾何学的空間と解された外界に求めるという(皮膚の境界面によって隔てられた)感覚の内・外の分断である。シュトラウスは主にパヴロフの反射学説を槍玉に挙げながら、このような「空間的に分離された神経系の装置における諸体験の対象的個別性にその場を指定する局在論」[3]では、有機体内部の機能の場的結合が体験作用を構成するものとされ、それゆえ体験の主体は物理的周縁から影響

を被り、かつそこへと作用を送り返すだけの単なる自動応答機械、動かされた(bewegt)物体にすぎなくなるという。というのもそこには、言わば可動的光源、つまり身体を介して世界へと振る舞う自己(Selbst)、運動する主体が欠けているからである。例えば身体に関して私が自分の腕を意のままにしうることのうちには、私と腕との共属性の連関、「相互生成(Miteinander-werden)」の関係が存していて、機械運動ではない生き生きとした自己運動が含まれている。ところが刺激―有機体の連関、ひいては物理学的考察一般においては、「私の」、「あなたの」、「彼の」といった所有の人称代名詞は何ら意味をもちえなくなる。大脳生理学者Dr・Xが「私は見た、感じた、知った。」を「私の脳はかくかくに刺激された。」と翻訳したとしても、それでもまだ充分ではなく、厳密には「脳Xが刺激された。」と言うべきなのである。

後述するように感覚作用の内・外の現象は実は、体験する主体の能力と相関的に開かれてくる活動空間の現象であって、したがって個体(Individuum)と世界(Welt)の関係もまた「共―生成(Mit-werden)」として開陳されねばならない。ところが、感覚を有機体の内に埋め込む(einbetten)機械論的心理学では、デカルト以来のアポリアである感覚の脱内在化の問題、即ち「心が孤独から、感覚の内在から如何にして世界へと、他なるものへと達するのか」という超越の謎は、依然として未決のままに留まる。シュトラウスによるパヴロフの反射学説批判の立ち入った検討はここでは省略するが、要するに、感覚の内在説にたてば体験主体の世界への交流の道は塞がれ、感覚作用と自己運動との生きた内的連関は捉えられないということをとりあえず確認しておく。

第二点、知覚の客観化的考察の問題について。客観的心理学が自らの方法論において首尾一貫たらんと欲するためには、一体如何なる条件が満たされねばならないか。観察主体を実験状況へと引き入れた時まず問題となるのは、「感覚の生理学」によって裏打ちされた有機体の客観的心理学的過程を測定し、記述する主体、その観察者自身の

自己理解はいつも不問に付されたまま、彼の直接的経験は既に与えられたものとして前提されてしまうということである。[4] この前提とは、被験者や彼に供されている実験対象等の可視的な周囲世界についての経験に他ならない。観察者は一方で、被験者の刺激 — 神経系(脳髄)の連関を見てとりながら、他方で実験状況において眼前する諸々の対象を周囲世界のうちに見ているという二様の態度をとっている。彼はこのことに気づき、自らの理論に忠実に、自分と全ての周界的事物との連関を刺激—反応プロセスに還元しようとするであろう。しかしこうした知覚の客観化的観察は、このこと自身がまた知覚〔観察者の有機体内部で営まれる神経プロセス〕なのであるから、これから説明さるべき知覚をまさに当の同じ未知の知覚によって説明するという一種の循環、即ちその「観察が理論的に問うその知覚、認識能作が常に既に前提されている」[5] という理論の矛盾を惹き起こす。

大脳生理学者を例に挙げ、具体的に見よう。〔ただし以下の説明は、シュトラウスの範例に適宜変更を加えて述べる。〕観察者X、厳密には彼の頭蓋骨に収納された脳髄の出来事〔公式 f(x. y. z. t)で言い表す〕は、被験者Yの脳内の出来事〔公式 f(q. r. s. t)〕について語るが(関数内の t は時間、x. y. z. q. r. s は刺激とみなす)、この場合そもそも後者とはその反応式を異にする前者の関数でもって、如何にして被験者Yの脳内のプロセスについて言表できるのかと、シュトラウスは問う。両者には共約不可能な溝が存してはいないか。しかも被験者に第三項である対象Gが供与され、この二つの反応関係を観察者が言表する場合には事態はより判明となる。観察者はG→Yの刺激と全く同じ刺激には与れないから、この連関をY→X、G→Xの二つの刺激 — 反応プロセスの同時的ないし継起的結合として解釈しようとするが、各々の刺激は有機体Xの内部で決して互いに干渉しえない独立した筋肉反応、脳髄の変化を惹起するにすぎない。両刺激は有機体Xにおいてばったり出遭うが、それはあたかも「一本の樹木にとまっている、きつつきとりす」のように互いにバラバラで、内的な連関へともたらされないのである。一般に客

観的心理学者は、現象を究極的には脳髄のプロセスに還元し、そこに何らかの意識(心)の与件を読みこんで、それを後から外へと投影する(内なる印象の原因を外に求める)因果推論に基づいて理論を構築する。しかしこうした「擬似現象主義的(epiphänomenalistisch)」理論では、G→Yの関係はあくまで有機体Xにおいて投影された(projiziert)プロセスにすぎず、それを自らの体験に包括することはできないのである。如何なる同型説(isomorphismus)を持ち出しても、脳髄の出来事、刺激—神経系といった中立的生起と、体験作用とを一つにまとめることはできないとシュトラウスは主張する。

そもそも神経系同志、脳同志の間には、相互交流の空間、出遭いの場が欠けており、空間が通常の知覚において現出している隔たり(Distanz)との接触もそこにはない。能の機能する空間は全く性質を欠いた近接、並存の秩序を有するだけで、言わば閉じられた空間なのである。[6]「隔たりと受容器(Rezeptor)とは相互に排除しあう概念である。[7]」ところが観察はやはり何らかの他なるもの(das andere)へと向かう。周囲世界を取り巻きとする体験主体、見ている(sehend)者にとっては、そこにおいて他なるものと出遭い、交渉しうる場、空間、時間的隔たりが存しているのである。観察者も被験者も各々が相手の刺激を共有することはないが、それでもやはりわれわれは相手を理解しあえるのであり、むしろ物理(生理)学的事象の理解は、具身性(Leibhaftigkeit)を有する人間の体験理解に基づいているということができる。

シュトラウスは現象学の鋭い洞察であるパースペクティブの理論を引き合いに出して、事物がその多様な現われ(パースペクティブ)を異にしながらも、同一のWasとして同定されることから、われわれ人間も互いの見ること、聞くことには与れないとしても、共通に呈示される可視的なもの(das Sichtbare)、究極的には世界を媒介として、互いに共々という仕方(Zu- und Miteinander)で交流しあっていると説く。われわれは、あらゆる対象をわれわれ

にとって(für uns)可視的周囲世界の内に見出すのであり――この自我―他なるもの(世界)という根源的連関こそ、シュトラウス哲学を貫徹する根本テーマである――、それとは逆に感覚の内存在批判でみた意識内在の一切の教えは、物体(脳)同志、意識同志の意志疎通の可能性を閉め出す理論的な虚構にすぎなくなるのである。

以上シュトラウスによる、物理学、生理学を範とする客観的心理学の感覚主義批判の要点を、大まかにクローズ・アップして概観してきた。では、有機体の刺激に対する関係とは根本的に異なる、体験する生きものの周囲世界への関係とはどのように記述されるべきか。次にシュトラウス独自の感覚論に立ち入って、感性的体験作用の現象学的内実の原理的洞察へと進むことにしよう。

II

既に触れたごとく感覚作用はシュトラウスによれば、認識作用の先行段階としてではなく、即ち高次の統握(覚)にその材料を提供する受容的なヒュレー的与件としてではなく、常に既に自己運動を含みつつ世界へと振る舞うものとみなされる。ここで当然問題にされるべきは、感覚作用と運動との生き生きとした内的な連関である。感覚の運動性に関する先駆的業績は、例えばD・カッツの、触覚質と緊密に結びついた運動の分析、V・ヴァイツゼッカーによる、有機体の構造の自己発展によって自らの環境へと関わる、その円環系の内に「主体」の運動形式の発生を見る「ゲシュタルト・クライス」の考え、フッサールの「運動感覚」論など、これまで様々な研究者の仕事に代表されてきたが、ここでは就中、シュトラウスがその後期の著作群に自分の思想との近親性を見てとっていたフッサールの考えをまず概観して、以下の考察の導きの糸としよう。既に運動感覚の概念については、運動の生理

学的心理学において例えばA・ベインの筋感覚の理論やH・エビングハウスのキネステーゼ的感覚表象の主張などによって、専ら意識に対しては全く外的な、しかも経験的反復からなる有機体内部の「運動遂行 Vollzug」としてのみ語られてきたが、シュトラウスはこうした考えを徹底的に論駁し、あくまで体験主体が自らの運動の方向、限定、分節化の可能性を内に孕んだ周囲世界における運動を強調するのである。その点で、フッサールの現象学的還元の意図とも重なるはずである。

客観的空間内の単なる生理学的、機械的運動を意味しない主観の動きの感覚「私は動く(Ich bewege mich)」である「キネステーゼ(Kinästhese)」〔客観的運動に還元を施すことによって得られた純粋現象〕は、例えば私がかくかくに眼を動かせば、それと相関する対象の像を自らの動機づけ〔Wenn—so の Motivation の連関〕によって呈示する。感覚的ヒュレーがそれとして与えられるための制約として、身体器官の自由な統御〔意志器官として私が自分の身体を意のままにしうること〕、つまり空間性、場の表出に寄与するキネステーゼが感覚に密接不可分に属する契機とみなされた。フッサールはそこから空間・物構成における対象—地平構造や、「二重感覚」の現象など有意義な成果を紡ぎだすのだが、しかしながらそこではおしなべて、言わば等質的空間内のそして専ら知覚平面での色や音といった対象の客観的属性が分析の素材となり、ラントグレーベも鋭く指摘しているように、依然として感覚主義的伝統の残滓の色濃い概念による記述に留まっている。[8] われわれはここでフッサール批判を意図しているのではないが、彼の運動と感覚の内的連関の主題化という基本発想を充分摂取したうえで、それをなるだけ現象的所与に即して、体験する主体の世界への振る舞いにおいて虚心坦懐に記述することがむしろ肝要であろう。したがって純粋な感覚性質、与件の統握によって成立する知覚を 原基的な根本経験におき、高次の価値的、実践的、情意的な経験の諸相を前者によって言わば建て増しされた派生的なものとみなす「基づけ(Fundierung)」の理論

――フッサールは久しくこの考えから解放されなかったが――は、当然括弧に入れられねばならない。というのもまた、フッサール自身が後期に至っては、主体の人格的交流において、世界を単に知覚的にだけではなく、われわれの関心を惹き、動かし、妨害などする取り巻きとして意識している在り方についても記述しており、さらには感覚的ヒュレーの分析にむしろ「感情」要因を入れこんで考察することの意義を暫定的に示唆しているからである。引用しよう。「感情の領域に基づいて、感性的与件と根源的に一つになった感情を含めて考えて次のように言っても構わない。一方でここで生じる触発は機能的には、対照(Kontrast)の相対的な大きさに依存しているということ、他方で優先さるべき感性的な感情にもまた依存していること、…さらにまた、根源的には本能的、衝動的な優先もここに含まれる。[9]」(傍点筆者強調)

『受動的綜合の分析』中のこのプログラムの具体的分析がどこかで、例えば「衝動志向性」をめぐるマニュスクリプトの議論に含まれているかどうかを検討する能力は今の私にはないが[10]、いずれにせよ上の文言の中に、もっともフッサールが「基づけの転倒」を意図していたと否とに拘らず、以下のシュトラウスの感覚作用の定義と共通する視点が存していることは確かである。つまり現象学の画期的な洞察と目される「キネステーゼ」論、換言すると「自己運動(sich-bewegen)」の理論に、感情要因、広くは価値や実践性格をまとった「表現性質(Ausdruckqualitäten)」[11]の考えを導入して、新たな現象学的感覚論を構想することである。このことはまた、経験諸科学の豊かなデータを事象的に吟味することによっても、その真価が認められよう。そこで、感覚作用の表現性質、シュトラウス独自の用語では「相貌的、ないし人相学的な」性格と呼ばれる概念を手引きとして、以下では体験主体が第一次的には世界とどのように関わっているのか、その次第をより具体的に見ていくことにする。

生気づけられた(beseelt)体験作用として 理解された感覚作用は、人間や動物のそれを問わず、身体を媒介とし

て他なるものへと開かれている。シュトラウスが度々強調する自我―他なるもの(世界)という普遍的テーマ、「全体性連関(Totalitätsverhältnis)」[12]〔これは個々の感覚や運動のプロセスを有機体内部に見出すようには、決して直観的には挙示されえない〕によってわれわれは既に交流のうちにあり、事物や他者と相互に意志疎通し了解しあっているのである。「感覚作用とは… 共感的(sympathetisch)体験作用である。」[13]その際――これが就中シュトラウスの感覚論の要をなしているが――個々の感覚作用(視覚、触覚…)はこの全体性連関のその都度の限定、非―全体(un-ganz)として登場してくるのであって、自我―世界という感覚の交流仕方に着目するならば、個々の感覚の差異性、異質性はむしろ、感覚の共同、統一の可能性を前提しているということができる。このことは、心理学者のH・ウェルナーによって提唱された、知覚経過と情動との未分化な過程から生ずるとした「共通感覚(Synästhesien)」の思想にもつながるものである。[14]諸感覚同志が互いに交流するさらなる基盤として、それゆえどんな感覚にもこの自我―他なるもの(世界)という根本テーマは決して欠けることなく保持されている。もちろん各様態の違いによって、例えばすぐれて対象認知に富む視覚と、対象―自己認知の性格を半々に分かちもつ触覚、そして就中自己感覚のみが際立っている(身体的孤独へと投げ返される)痛み等の間には、「感覚のスペクトル(Spektrum)」[15]の漸次的配列が見出される。しかしながら、感覚にはおしなべて自己感覚を通じて何かあるもの、他なるもの(世界)が告知されている点には変わりない。目を眩ます強い光のもとでは視覚の妨害がよりはっきりと意識されるし、逆に何も見えない暗闇の中でも何かが、例えば得体の知れぬものへの恐れ、畏怖といった他なるものが呈示されているのである。では、このように体験主体と世界との関係を生ける交流仕方、接触の仕方のうちに据えるとどうなるか。

シュトラウスは、主体の自己運動、運動の方向を舵取りするものとして、かの交流仕方に基づく相貌的・人相学的性格――「誘惑する」と「脅かす」、「愛らしい」と「厭うべき」といった相反する二つの性格――を枚挙し、こ

れらの性質をもつ事象へと近づいたり(auf zu)、そこから離れたり(von weg)する「統一(Einigen)」や「分離(Trennen)」の可能性のうちに、自己運動の本質を見てとっている。「個々の(動物の)類に対応する周囲世界は、誘惑するもの、脅かすもの、欲求したり、忌避する働きの諸領域に分節化されている。[16]」感覚する生きものは、思惟や判断によって世界と対峙しているのではなく、まさに誘惑するものがそれ自体として誘惑してくるのであり〔統一の場合〕、あるいは脅かすものがそれ自体として脅かしてくるのであって〔分離の場合〕、これら表現質の直接的な接近の仕方が、生きものを感覚し運動するものとなす。したがって既に見た有機体における刺激 — 神経系(脳髄)図式では、より以前の経験に基づいて獲得された知によって、反応プロセスを反復するという過去決定論、因果説の考えに陥ってしまうのである。(未来をも包括する生成するwerdend時間連関における感覚作用の分析は次節に譲るとして)体験する生きものは自らの感覚性を感覚器官の生理学的機能に負うているというよりも、これらの情意的な特性に負いつつ世界へと振る舞っているというわけである。かの有名な「反射弓(Reflexbogen)」の理論〔刺激 — 求心性回路 — 中枢 — 遠心性回路〕にしたがって、例えば上腕二頭筋や胸筋が危険から逃れるというべきではなく、「動物は全体として動いていて、自らの周囲世界へと向けられている」のであって、かつ「意味 — 地平の内部にある対象が運動方向を規定するのである。[17]」しかもこの対象は、われわれの目に見える巨視的な(makroskopisch)基準を有するのでなければならず、例えばのろ鹿にとって喉の渇きを潤す水は分子H_2Oではなく、周囲世界における可視的対象、まさに飲むための水でなければならない。(ここで強調して断っておかねばならないが)もちろんその際、首を水へと伸ばす筋肉運動、視神経、脳髄の活動等が一切等閑視されているというのではない。むしろこれらの微視的な(mikroskopisch)活動は、体験する生きものの身体において、生理、物理学的現象を体験世界へと媒介し、現象世界のうちに安定した秩序を保持せしめる働きをしているのである。[18]

要約すると、シュトラウスはフィジオミニッシュな性格を、感性的体験の初次的段階として基本的には右の二つのクラス、統一と分離、即ち「つき従う(Folgen)」ないし「〜へ向かう(Zuwenden)」と、「逃げる(Fliehen)」ないし「〜から逸れる(Abwenden)」に範例化し、――もっともそのヴァリエーションは認めつつも――この二つの可能性が開かれている場合にのみ、事物や他者、世界といった 他なるものとの共生的な(symbiotisch)理解が成り立つとみるのである。この点でかごの中の鳥や、一種虚構的にしつらえられた実験室の状況は、この要求に堪えうるものではないだろう。

シュトラウスの仕事に自らの「感覚論の原理」の大分を負うているとするL・ラントグレーベは、これらの表現性質をM・ハイデッガーの「情態性(Befindlichkeit)」の概念と結びつけて、感性的触発を被る可能性としての自己運動の根底に、「気分づけられている(gestimmtsein)」、「感じられてある(sich-fühlen)」身体的情態感〔Ich befinde mich leiblich〕をおき、これによって初めて世界が第一次的に開示されるとみなしている。

「この自己運動は、気を惹く、厭わしい等々の根本的な性質――そこにおいて、私に私の情況が存在者の只中で了解さるべく与えられている――によって導かれている。[19]」しかも彼の強力な論点は、心の発達においては人間はその初期の発達段階から既に感情という主観的な領域と、対象的なものの領域とを截然と区別しているわけではなく、むしろこれらの表現性質や相貌的なるものへと 向かう運動(Hinbewegung)があって初めて、その後に感性的な諸性質を伴った区別可能な対象についての意識も生じてくるという点である。このように、体験主体の世界への直接的な関与において、感覚作用と自己運動との内的な連関、ならびにその自己運動を舵取りする対象の表現性質、相貌性格に、意識構造の一契機としての「自己感覚作用(sich-selbst-empfinden)」の基盤が見出された。では次に、この自己運動の意識、私が動くことによって感性的な触発が調達される「活動空間」の意識とその「超越」の運動を、

感覚作用の空間・時間形式としての「遠さ」の現象に即して見ていくことにしよう。

Ⅲ

ここでは、シュトラウスの現象学的還元の手続きを辿りながら、感覚作用を、客観的な空間・時間概念から解き放し、[20]「原現象(Urphänomen)」としての「遠さ」ないし「活動空間」の現象を露呈することによって、感覚の内在説によって生じたアポリアを克服する道を探る。考察の手引きとして、まず感覚(官)が通常如何に区別されているのかの検討から始め、その反省を通じて感覚作用の本質には何が含まれているのかを考えよう。

一般に遠くにあるものについての感覚、例えば視覚、聴覚、嗅覚などは通称、「遠感覚(Fernsinn)」と呼ばれ、主体と対象とが距離をおく関係にあり、他方、近くにあるものについての感覚、例えば味覚や皮膚感覚(触覚、温度感覚等)は、「近感覚(Nahsinn)」と呼ばれ、主体と対象とが直接的な接触の関係にある。しかしこのような区分は、シュトラウスによれば客観化的考察の賜であり、予め既にある客観的空間を前提したうえで、言わば傍観者のように主体が世界の外に立って(exstramundan)感覚を受け取る仕方の区別に他ならず、世界の内で自己を感覚する生きられた主観性はこの考察からは剥奪されている。彼は、感覚(官)の統一を感覚仕方の統一ではなく、結局のところ感性的諸印象の統一として解釈した(ヒューム、カント、フッサール等の)伝統的哲学の「感覚 ― 統握」図式や「感覚の生理学」の理論を引証し、これらに共通する誤りを「諸感覚は、常に数多性において登場しつつ無秩序の質料を形成し、好んで自らの本質を変えることなく、外からやってくる秩序に接合される」[21]考えだとして鋭く批判する。感覚心理学では、これら無秩序の混沌とした感覚を、注意・習慣・記憶などによって結合し、完成した知覚

対象にまでまとめあげるが、その際感覚は、知覚という総合機能の単なる原料として、認識作用の方からして既に出来上がったもの、完了した(perfekt)ものとみなされ、一切の空間・時間形式から分離されてしまうのである。このような態度をとる観察者は「遠さ」――遠い・近いの極的な(polar)分節化を内に孕んだ包括的な遠さ――の現象を、生成する(werdend)主観性から解き放ち、それを純粋な空間的位置関係、つまり並存および共存の秩序へと還元してしまう。こうした考えは空間の等質化と同時に、時間における原子論的に分離された個別的諸印象の集合を感覚とみなすという仮定を前提している。感覚(官)の遠―近の区分もこの仮定から生じてくる誤った先入見であるとシュトラウスは断ずる。

感覚は一方的に遠・近のいずれかに組み入れられるものではなく、その各々が相対的な遠―近の対比をうちに含んでいるのである。ちょうど見ることにおいてわれわれが、可視的なものだけでなく自己自身をも「見る者」として体験しているのと同様に、例えば接触(触ること)においても、触覚質が手の運動によって供与されることからも、それはあくまで遠くからの接近(Nährung)であり、疎隔化、解き放ち、消失の可能性は依然として存し続ける。したがって「遠さ」とは、等質的空間内の客観的に測定可能な長さ、距離といった単位ではなく、体験する主体の「居所(Aufenthalt)」、状態(Befinden)に基づいたいわゆるパースペクティブ的に方位づけられた現象世界であって、それは客観化された世界からは決して導出されえない原現象に他ならないのである。「私が私の世界へと向けられ、その世界の内で統一や分離において自らを感覚しつつ動き、動きつつ感覚する限りで、遠さは私に開示され遠―近に分節化される。[22]」遠さの開示は、体験主体のパースペクティブ性からは分離できないとするのは一般に現象学の鋭い洞察でもあるが、ではこのように解された自己運動する感覚作用の第一次的な空間・時間形式はどのように記述されるべきか。

それは運動の出発点である主体の居所、即ち、ここ(Hier)と今(Jetzt)、およびその運動の終極点である目標としての、そこ(Dort)とその時(Dann)という単純にして含蓄のある形式で表される。〔方域の地理学〕しかもその際、目指さるべき運動の方向、目標は「将来的なもの(Zukünftiges)」として眼前に(vor)直観されていて、ここに刺激―有機体の図式における完了態としての過去優位性ではなく、感覚作用の移行、変化、生成の連関、就中生き生きとした時間連関を見てとることができる。この未来への開在性(Offen-sein)なしには、方向や目標というものは何ら意味をもちえなくなる。生成におけるここと今(顕在性)は、これもまた自我―世界連関の全体性(潜在性)のその都度の限定として捉えられるべきであって、それゆえ今においては、過去の非―今、未来の非―今を共に指示しつつ、一つの全体性連関の一瞬間として世界と私とが経験されるのである。ここには現象学的洞察における、まだない―今―もはやない、の相互否認における相互的な合致関係が存していると言えるだろう。[23] 人間や動物はその都度の情況や関心によって導かれつつ、否、単なる自動運動(不随意運動)ですらも、遠さの現象である一方の極、近くの「ここと今」(出発点)から、他方の極、まだあらぬ遠くの「そことその時」(終極点)へと向かって可能的行為の「活動空間」を自らの周りに投射するのである。例えば、犬が走ってきた自動車(妨害)から跳び退けるという現象[24]において、犬が現在の居所であるA地点から安全なB地点へと跳躍する自己運動では、A→Bの時間・空間的な方向づけの空間、間空間(Zwischenraum)は単なる等質的空間ではなく、まさに危険から逃れるという意味的な空間に他ならない。犬は跳躍する前に、他なるものとしての方向、目標を将来的なものとして今において直観するのであり、ここには生成、移行における「今からその時」への生き生きとした時間連関が支配しているのである。犬の個々の運動位相を生理学的に如何に精緻に分解し総合しようとしても、なぜ犬が跳ぶのかという自己運動の問いには何ら答えを与えることはできないであろう。[25]

「遠さ」とはこのように、感覚作用の純粋な空間・時間形式なのであり、それは生成し欲求する生きもの、目標へと方向づけられる生きものと相対的なのである。感覚の内在説批判で言われた内・外の現象は、現象学的には体験主体の能力「〜できる(Können)」と相関的に開かれてくる活動空間の現象に他ならない。フッサールも「世界は…自我の能力である[26]」と述べているが、それは単に身体運動を含めた認識能力だけに限らず、価値や情意まで含めた人間のあらゆる実践的な能力と世界との相関性を表現しているとみなすべきである。もう一つ例を引こう。一般に聴覚においては視覚や触覚と異なって、印象の受動性が強調される。極端な場合、工事現場のうるさい掘削器の騒音が否応なしに耳にとびこんでくる時など特にそうである。しかしシュトラウスが言うように、対象性の登場や退去が交流仕方の変様に、自我の世界への振る舞いの変様に基づいていることからすれば、騒音が全く気にならない人にとっては、騒音は彼の関心の外にあって嫌悪感を催させることはないであろう。大勢の人によって一杯になった大広間に足を踏み入れ、入り乱れた声が声高に響く時に、その人達への帰属感が少なければ少ないほど、ますます騒音は不快になってくるが、中で仲のいい友達と出会い固有な対話の空間を築いたとたん、先ほどの声の雑音は次第に後退していく、といった経験は誰しももっているだろう。その意味で「騒音の感受性は、妨害された世界との交流の一表現であって、聴覚神経の変容された機能の記号(Zeichen)では決してない[27]」のである。また、病気にかかり身体的不調を訴える患者にとっては、身体はよそよそしい(対象的な)ものに感じられ、世界と疎隔化された気分に陥りやすいのに対し、逆に気分が高揚したり解放感に満たされている時などは、自我は身体との衝立てを打ち破って世界と溶け合うような次元に移行する。このように「世界は感覚する者の世界への振る舞いとして、つまり可能的行為の活動空間のその都度の限定として、内と外へと分節化される[28]」のであって、それゆえ感覚、意識内在の教説では、感覚作用の自己運動に基づくはずの内→外への超越の謎は依然として未決の問題に留まってし

まう所以である。

Ⅳ

これまで見てきたように、シュトラウスの終始一貫した意図は、実証主義的方法に基づく客観的心理学や機械論的生理学の感覚についての原子論的見方を徹底してしりぞけ、精神病理現象など様々な人間的事象にアプローチすることによって、生きもの(人間・動物)と世界との前対象的、前概念的な情感的コミュニケーションの在り方を、その全幅にわたって現象学的に記述することに向けられている。彼は当代の様々な心理学や生理学の知見を批判的に検討しながら、体験する主体を第三者的な客観的過程に還元することの不可能な事態を剔抉し、感覚作用を自我と世界との生きられた交流と捉え、感覚概念にその具体的な内実を盛りこもうとしている。本稿では触れられなかったが、実際「目覚め」、「幻覚」、「定住(Behaustsein)」といった日常世界における具体的現象を取り挙げ、情動的な感覚的生の在り方を実り豊かに分析している。こうした方法は、人間(有機体)の行動を物の秩序(生理学)にも、心の秩序(心理学)にも完全に回収できない主体の実存の運動、世界―内―存在の運動とみなし、両者を統合する第三の説明様式を見出そうとするメルロ＝ポンティの試みに極めて近い。彼は『知覚の現象学』において、身体的―知覚的行動の内的考察へと移行する際次のように言う。「生き生きとした身体の機能は、私がこの機能そのものを遂行することによってのみ、そしてまた私自身がそこにおいて世界へと向けられたこの身体であるその限りにおいてのみ理解される」[29]と。しかも双方の試みは、フッサールのように意識の超越論性を徹底して掘り起こしていく態度とは対極的に、むしろ生活世界(Lebenswelt)のうちに踏み留まって、人格的態度に基づく周囲世界との価

値的、情意的な実践的交流を主題化するという点で軌を一にしている。ここで強調したいのは、単なる「定位空間(Orientierungsraum)」を開示する 身体のキネステーゼ的能力意識、知覚器官としての フッサールの最初の規定に、「世界へと向う存在(Zur-Welt-Sein)」、「世界への振る舞い」としての 身体性(感覚性)の具体的記述を結びつけることの必要性である。[30] メルロ＝ポンティが言うように、身体を介した実践的認識(Prakto-gnosie) ――単なる物理的刺激ですらも、有機体にとって有意味な刺激として初めて存立せしめる ――によってこそ周囲世界は開示されるのであり、まさに行動(振る舞い)こそあらゆる刺激の第一原因なのである。

その意味で、シュトラウスの対比になる、「刺激 ― 有機体」の連関とは根本的に異なる「周囲世界 ― 体験する生きもの」の連関において、あくまで体験する主体がその自己運動を通じて周囲世界へと振る舞いつつ、その都度対象のもつ全体的な意味(＝共通感覚的意味)に反応しているという洞察は、感覚作用の固有な在り方を 際立たせたという点で、ラントグレーベも指摘しているように、単に心理学の基盤への問いのみならず、哲学的意識論一般の根本概念としての感覚概念の変更に寄与したと言えるであろう。そこで最後に、その意向にかなう分析の発展的方向性を、Ⅱ) で言及した感覚の表現質・相貌性格にことよせて示唆的に述べておきたい。

既に触れたように、体験する生きものにとって 周囲世界はその都度の欲求や関心(忌避する、厭うといったマイナスの表現質も含めて)によって予め有意味に切り取られた世界であって、これらの欲求や関心の構造の方が逆に、生きものが知覚しうる対象にとっての必然的な実在条件を含蓄しているのである。このことは「知覚の基づけ」と絡んでくる複雑な難問であり、より詳細な議論が要求されるが、フッサールも後期に状況空間を開示する「関心(Interesse)」の概念に言及しているように、むしろ知覚関心に導かれた一般的かつ包括的な構えこそが世界を世界として存立せしめているということである。[31] これらの関心は、その都度の生の(vital)欲求のみならず、既に文化的、

歴史的な刻印づけを受けたものもあるだろう。主体の世界への直接的な関与を露呈する有効な範例として、ラントグレーベは「驚がく、脅かすものからの退却、感覚(官)を麻痺させるようなこわばり(硬直化)」といった現象を挙げ、「情態性」による世界の第一次的な開示のされ方を分析する手がかりを提供してくれている。感性的な知覚段階でさえ、例えば赤や青等の色が、それぞれの「気分価値(Stimmungswert)」や運動性相貌、生命的意味、道徳的作用(ゲーテ)などをもって現われてくるように、われわれはこうした情感的な交流仕方をこそ、感覚論の根本テーマとしてもっと考究していく必要があろう。またシュトラウスも、感覚(官)から感覚(官)へと変化する接触(Kontakt)の様式が、社会的振る舞いの遊戯規則を規定するとして「感覚(官)の社会学」[32]の可能性を挙げ、人為的なものと自然的なものとがその結節点をなす感性的体験の固有な在り方、例えば各民族の生活様式における感覚の交流の相違(覆いとしての服装や身体的所作のもつ意味)に触れている。このようにあくまで具体的事象に即して、感覚作用の現実分析を実地に移していくことは極めて意義があるように思われるし、「世界―内―存在の仕方」としての感覚作用への問いというスローガンが確定的なものではなく、あくまでその都度の具体的分析を導いていく示唆として受け取られ、しかもその内実を豊かに含蓄していくことが可能となるはずである。

註

(1) Straus, E., Vom Sinn der Sinne, Berlin Göttingen Heidelberg^2 1956.

(2) Landgrebe, L., Prinzipien der Lehre vom Empfinden, in: Zeitschrift für Philosophische Forschung 8(1954), S. 201.
ラントグレーベの総括によれば、十九世紀末に至るまで感覚作用は心理学の感覚主義的伝統の枠内で、専ら要素心理学(Elementarpsychologie)の脈絡において扱われ、現代になって漸くこれとの批判的対決の過程で、ゲシュタルト心理学による心的機能の全体性として解明されるようになった。しかし、このような「下からの」心理学と、例えばディルタイ

の標榜した精神科学の方法論としての「意味了解的」心理学、いわゆる「上からの」心理学との間には架橋できない溝が存しており、それゆえこの両者を全体として包括し、感覚概念を心理学のみならず哲学的意識論一般の根本概念として統一し、相互に連関させる段階には達していなかったという。この事態は、哲学的人間学、ひいてはフッサール現象学やハイデッガーの人間的現存在の試みにおいても然りである。一方、具体的な心理学の問題設定に依拠しつつ、それと現存在の了解的解釈の試みとの調停を図って、哲学的な意識論一般のカテゴリーの変更を企てた先駆者として、ラントグレーベはフランス哲学ではメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』、プラディーヌの『感覚の哲学』、サルトルの『存在と無』を挙げ、ドイツ哲学の内部での著明なキー・パーソンとしてこのシュトラウスの名を挙げている。

(3) Straus, E. ebd., S. 55.

(4) シュトラウスはある客観的心理学者にことよせて次のように語る。彼(心理学者)は一方では日常生活において悩みや苦しみ、笑うなどする一個の人格的存在でありながら、他方では客観的傍観者の立場で自らの研究、例えば被験者の観察、記述に携わる。その際、後者の立場に留まる限り彼は被験者と共に悩みや苦しみを共有することはないし、そこでは伝達や意志疎通の手段は全て廃棄されることになる。なるほどまさしく彼は、行為し、話し、喜び、苦しむ、そして自らの研究成果をすらも言表し、それを他人にも理解してもらえる場、即ちこの共通の日常世界に属しつつ、しかしこの根源的経験を徹底的に還元(抽象化)するのである。ebd., S. 120.
「自然的世界において知覚し、またそこにおいて物理学的世界を構成する人間の人格統合(Personalunion)は不問に付される。」
ebd., S. 192.

(5) Asemissen, H. U., Das System der Sinne, Die Phänomenologie und die Wissenschaften, in: Phänomenologische Forschungen 2, S. 91.

(6) 客観的心理学の図式では、光源、光刺激の出発点が重要ではなく、刺激が受容器に達する、即ち網膜に当たる地点(Angriffstelle)のみが斟酌される。
Straus, E. ebd., S. 169, 177.

(7) ebd., S. 174.

(8) もっとも、専ら対象意識を手引きとした、個々の感覚野の構造分析についてラントグレーベは、「この分析はこれによっ

て意識の究極的構成要素を手に入れる誤謬に陥らない限りは正当である」と述べ、感覚概念をあくまで現象学的地平の内部で深化させようとする試みだとして擁護している。

(9) Landgrebe, L. ebd., S. 204.

(10) Husserl, E., Analysen zur passiven Synthesis, Husserliana, Bd. XI, 1966, S. 150.
「立ち現われる際立たせられた感覚は、ある原連合的に秩序づけられたキネステーゼ(自我を欠く受動性のなかで)を覚起する。私が言いたいのは、感情的なもの(Gefühlsmässiges)が、全てのヒュレー的なものにおいて立ち現われるものとして、この覚起やそれに続く諸経過にとってそれなりの役割を果たしていると思えることである。」
Husserl, E., Transcr. E. III9, S. 23b, (1931), zitiert nach Ichiro Yamaguchi,
Passive Synthesis und Intersubjektivität bei Husserl, in: Phaenomenologica, Bd. 86, S. 111.

(11) Landgrebe, L. ebd., S. 204.

(12) Straus, E. ebd., S. 253ff.

(13) ebd., S. 207f.

(14) 現代心理学の側でも、不充分ながら感覚作用の交流仕方に着目していた先駆として、シュトラウスはカッツやウェルナー、フォレスターといった心理学者を枚挙し、例えばカッツの『色世界の構造』における、色が押し迫る、襲う(動詞型の言い回し)といった「印象性(Eindringlichkeit)」の概念が、純粋に客観的与件にも主観的な与件にも属さない感覚の交流として既に洞察されていたとする。
ebd., S. 216-220.

(15) ebd., S. 390.

(16) ebd., S. 238.

(17) ebd., S. 239.

(18) 「脳は諸分肢や、全体としての身体の諸運動を統制する。…脳が微視的な出来事を巨視的な出来事や行為に変換する(transformieren)ことによって…脳の役割は全体器官(Globalisator)である。」
ebd., S. 188ff.

(19) Landgrebe, L. ebd., S. 208.

(20) 客観的な空間・時間形式からの離反に着手し、シュトラウスの思想に大きな影響を与えた研究者は、ゴルトシュタインとゲルブ、ヴァイツゼッカー、ミンコフスキー、V・ユクスキュル、ボイテンディク、ビンスワンガー、F・フィッシャー、ゲープザッテルといった心理病理学者や生物学者達と、それと並行してベルクソン、フッサール、シェーラー、ハイデッガー、O・ベッカー、カッシーラー、シュペングラー、クラーゲスといった哲学者達である。
Straus, E. ebd., S. 405, Fußnote.

(21) ebd., S. 350.

(22) ebd., S. 408.

(23) 時間のその都度の顕在的位相における他の全諸位相の包括作用が可能となるためには、「各位相が全体構造(Ganzheitsstruktur)をもつ場合にのみ、即ち自我が根源的な意識の流れにおいて、各瞬間ごとに事実的な要素的な所与性へと向うのではなく、予め全体へと向う場合にのみ可能となる。」
Almeida, G. A., Sinn und Inhalt in der genetischen Phänomenologie E. Husserls, Den Haag 1972, Phaenomenologica, Bd. 47, S. 66.

(24) 全体性とその都度性、今とその定位存在、内と外について語られる一切は、動物にも充分妥当すべきだとして、シュトラウスは「動物の行動様式は、われわれに最も目的にかなう範例を提示してくれる」と、その意義を強調する。
Straus, E. ebd., S. 258.
但し、動物と人間とでは低次の感性的認知のレベルでは共通性は認められても、高次の認識や判断能力の点で自らの周界との関わりを改めて論理的に対象化しうるか否か、に着目した場合、大いなる懸隔があることもわれわれは認めないわけにはいかない。この点についてはボイテンディクの次の著書を参照されたい。
ボイテンディク『人間と動物』濱中淑彦訳、みすず書房。

(25) 「等価的な刺激に訴えるのでは助けとならない。動物は同じ反応で同じ刺激に応えるのではなく、その都度変化する特殊な状況に正確に対応する特殊な行為でもって適合するからである。」
ebd., S. 139.

(26) Husserl, E., Zur Phänomenologie der Intersubjektivität, Husserliana, Bd. XV, 1973, S. 621.

(27) Straus, E. ebd., S. 221.

(28) ebd., S. 253.

(29) Merleau-Ponty. Phänomenologie der Wahrnehmung, Phänomenologisch-Psychologische Forschungen, Band 7(1966) von Rudolf Boehm, S. 99.

(30) Melle, U., Das Wahrnehmungsproblem und seine Verwandlung in phänomenologischer Einstellung, Den Haag 1983, in: Phaenomenologica, Bd. 91, S. 126.

(31) ebd., S. 111f.

(32) Straus, E. ebd., S. 395.